

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

啓蒙期ウィーンの「都市描写」：
ヨハン・ペツル『ウィーンのスケッチ』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2000-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山之内, 克子, Yamanouchi, Yoshiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1437

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



啓蒙期ウィーンの「都市描写」

—— ヨハン・ペツル『ウィーンのスケッチ』を中心に ——

山之内 克子

1. はじめに一ヨーゼフ2世とウィーンのパンフレット・ブーム

プロイセンの啓蒙主義者、フリードリヒ・ニコライ (Friedrich Nicolai) は、1781年、自ら編集した『ドイツ図書目録』の中で、当時のウィーンの出版状況を評して次のように書いた。

「……存在する限りすべての印刷機がフル回転し、さながら雨後の筍のように、何百という書物が生まれている。……出版の自由がそのまま続き、初めの一步を踏み出したあとに後戻りするようなことがなければ、この夜明に続いて必ずや明るい昼が訪れるであろう。すなわち、より良い書物、より重要な哲学的作品……そして、⁽¹⁾ 全国民の啓蒙が、確信をもって期待できるのである。」

18世紀、啓蒙主義が普及した北ドイツの諸都市で、書籍・出版市場が著しい活性化をとげつつあったとき、反宗教改革の砦であったウィーンは、文化的後進地の座に甘んじていた。ジェズイット教団の支配下で、フランス啓蒙主義の著作はもちろん、ドイツの新しい文学作品ですら、少なくとも表向きには、市門を潜ることを許されなかった。また、首都の出版業者が読者に向けて供給するものは、祈祷書や宗教的修養書、暦の類に限られていた。そして、1781年、この文化的遅滞状況を一変させ、のちにウィーンに対する最も手強い批判者となるニコライに、手放しで賞賛の辞を認めさせた大変革は、^{しな}いうまでもなく、ヨーゼフ2世による啓蒙主義的改革の一環としてもたらさ

れたものであった。

教育・文化におけるジェズイット教団の独占的支配を排除する試みは、すでに、マリア・テレジアによって着手されていた。なかでも、検閲制度の改革は、この文化政策の大きな要であった。マリア・テレジアは、検閲機関からカトリック聖職者を追放して、これを啓蒙主義的志向を持つ国家官僚の手に委ね、封建的、カトリック正統主義的な視点に代わる、新しい、合理的・科学的な検閲基準を確立しようと努めた。⁽²⁾その結果、とりわけ学術書については、事実上、検閲そのものが廃止され、解剖学の専門書が、ジェズイット僧によって「淫らな書物」の烙印を押され、発禁処分を受けるような不条理は、1750年代末にはすで見られなくなっていた。⁽³⁾

しかし、自然科学の専門書とは異なり、一般の読者を対象とした文芸書、哲学書に関しては、引き続き厳しい検閲が行われた。禁書目録のタイトル数は未だに5,000を超えていた。⁽⁴⁾また、ウィーン入りする旅行者は、警察によって厳密な荷物チェックを受け、携帯する書物が原因で、市門に数日足止めされることもしばしばであった。⁽⁵⁾このように、合理主義的国家改革を謳いながら、一方でカトリック教会の教権主義に阿ねるマリア・テレジアの方針は、啓蒙主義に深く傾倒し、プロイセンのフリードリヒ2世の中に君主の理想像を見出した息子、ヨーゼフ2世を、著しいフラストレーションに陥れていた。すでに、共同統治者として即位した1765年、ヨーゼフ2世は、書物と検閲に関して、「一般的に考えて弊害がないと判断し得るものは、すべて許可されるべきだ」として、母帝とは一線を画する、独自の指針を表明していた。⁽⁶⁾

母帝の死後、国政の主導権を手にして間もなく、ヨーゼフ2世は、1781年2月、「将来における出版物検閲規定の整備に関わる基本原則」として、全く新しい検閲の基準を打ち出した。皇帝はここで、「良書の普及を妨げるよりは、むしろ、多少の悪書を放置する」という、検閲制度の新方針を強調し、プロテスタントをはじめ、他宗派の宗教書や、これまで決して許可されるこ

とのなかった社会風刺的な文書にも、寛容をもって接することを宣言した。⁽⁷⁾
同年11月、この「基本原則」は、ほとんど修正されることなく検閲法として
発布され、さらに、1783年、これにしたがって編まれた禁書目録は、わずか
900タイトルを挙げるのみであった。⁽⁸⁾

冒頭に引用したニコライの記述は、新しい検閲法が首都にもたらした、未
曾有の出版ブームの凄まじさを伝えている。そして、ここで、「雨後の筍」
のように、膨大な数で都市に氾濫した印刷物とは、ほとんどが、「パンフレッ
ト (Broschüre)」と呼ばれる小冊子であった。通常の本よりも質の悪い
用紙に刷られ、包装用の青い紙で綴じられたこれらの冊子は、平均して一冊
60ページ構成、3～40クロイツァーという、印刷物としては比較的安価で販
売された。⁽⁹⁾ 検閲法で社会風刺が許されたことから、パンフレット作家は、都
市住民の好奇心を掻き立てるテーマを抜って人気を博し、ウィーンは、1784
年までの4年間にわたって、パンフレット・ブームをみるに至った。⁽¹⁰⁾

ウィーンのパンフレット・ブームについて、作家であり、同時に検閲官で
もあったアロイス・ブルマウアー (Alois Blumauer) は、1782年、詳細な
報告書を纏めた。ここで彼は、同年9月までに発行された1,172タイトルの
パンフレットのうち、その代表的な作品48点の題名をリスト・アップしてい
る。⁽¹¹⁾ 教会音楽や修道院の風習、火災などの小事件、婦人の衣服の流行など、
ブルマウアーが挙げたタイトルは、一見、相互に一切の関連性をもたないか
にみえる。しかし、実際には、ある共通の関心が、著しい多様性を超えて、
これらのテーマを根底で強く結び付けていたことを、看過してはならない。
すなわち、ウィーンという都市地域で生起する大小の事件や、そこで営まれ
る人々の生活に対する、局限された深い興味と関心である。⁽¹²⁾

このブルマウアーのリストから、すでにマリア・テレジアの時代よりウィー
ンでも発行され、固定読者を得るようになっていた道徳週刊雑誌
(Moralische Wochenschrift) や新聞と比較して、これらのパンフレットが、
極端に強い地域色を呈した読み物であったことが明らかになる。ウィーンの

パンフレットが、これまで決して文学的評価の対象とならなかった理由の一つが、この、あまりにもローカルな特性にあることは、いうまでもない。文学史家カイ・カウフマン (Kai Kauffmann) は、これらのパンフレットを、改めて「実用文学」として定義した上で、「都市描写」のメディアとして、その再評価を試みている。⁽¹³⁾

ウィーンにおける「都市描写」の起源は、15世紀の人文主義者、アエネアス・シルヴィウス・ピッコロミニ (Aeneas Sylvius Piccolomini) まで遡る。その後、18世紀に至る過程で、訟歌や地誌、また旅行者向けのハンドブック等の形態で、数多くの「都市描写」が生み出された。⁽¹⁴⁾しかし、ヨーゼフ2世時代のパンフレットを、これら「都市描写」の伝統の流れの中に位置付ける際には、とりわけ慎重を期さなければならない。両者は、読者としての対象設定、あるいは、提供する情報の性質という点で、本質を異にしていたからである。すなわち、旧来の「都市描写」が、それが献呈された皇族や(訟歌)、また、騎士旅行をする貴族の子弟など(地誌、ガイドブック)、限定された「受け手」を想定し、彼等に対して、都市に関する客観的・実用的な情報を提供したのに対し、パンフレット作家たちは、不特定多数の読者層に向けて、風刺、社会批評という、あくまで主観を通した都市の話題を発信していたのである。⁽¹⁵⁾

当時とすれば莫大な部数で発行されたパンフレットは、出版業者にとっては、短期間のうちに最大限の利潤を上げることを狙った、一種のベンチャー・ビジネスであった。⁽¹⁶⁾したがって、作家たちには、常に、貴族の使用人から国家官僚に至るまで、広い読者層がひとしく興味をそそられるようなテーマを、的確に見抜く才覚が求められたはずである。すなわち、パンフレットは、当初から「都市描写」を目的としたわけではなく、多くの人々、少なくとも文字を解した階層の共通の関心が、都市の問題に集中していたために、ここにその主題を求めざるを得なかったのである。

バロック時代、ウィーンに赴任した外交官、聖職者、また、世俗的な修養

を積み、視野を広げるために宮廷都市を旅した貴族の若者が、都市の構造や歴史、社会に関する具体的な情報を必要としたのは、当然のことである。しかし、差し当たってこのような必要性をもたない人々、なかでもウィーンに暮らし、土地の事情を熟知した読者たちが、敢えてこの都市に関するテーマを求めたのは、なぜか。ドイツ諸都市に数十年遅れて、ようやく導き入れられた啓蒙主義の息吹の中で、「読書」の自由を手にした人々の関心が、これほどまでに「都市」に集中したことは、とりわけ注目に値する。「啓蒙主義」が新時代のキー・ワードとして語られ、「啓蒙」のコンテクストの中で、新しい理想と世界観が掲げられたとき、都市の社会的・文化的位置価値にも、大きな変化が生じていたのではないか。すなわち、結社やサロンと同様、都市に対しても、「啓蒙主義と近代化の担い手」としての役割が求められたのではないか。

これらの問題設定から出発して、本稿では、都市を扱った夥しいパンフレットの中から、ヨハン・ペツル (Johann Pezzl) の『ウィーンのスケッチ』をとりあげ、ここに描かれた「啓蒙の都市像」を辿りながら、啓蒙主義と都市との相関関係の一端を照射してみたい。

2. ヨハン・ペツル『ウィーンのスケッチ』⁽¹⁷⁾

(1) 作家と作品

『ウィーンのスケッチ』の内容分析に着手する前に、まず、作家としてのヨハン・ペツル、そして、「都市描写」としての作品『ウィーンのスケッチ』が持つ意味について、概観しておきたい。

ヨハン・ペツル⁽¹⁸⁾は、1756年、ニーダー・バイエルンのマラーズドルフで、製パン業マイスターの息子として生まれた。作家として登場する1780年代以前について、詳細な伝記データは伝えられていないが、ジェズイット派の修道院において青年期の教育を受けたといわれている。ザルツブルク大学で法

律を学んだ70年代末には、修道院に関する詳しい知識をもとに、カトリック教会を批判する風刺的著作を発表、これがもとで、学業半ばにしてザルツブルクを去ることになった。すでに小説作家としてキャリアを築き始めた1784年、ヨーゼフ2世の啓蒙主義的政策に強く心をひかれてウィーン入りし、フリーメーソンのロージェを通じて、外務大臣カウニッツ侯爵（Wenzel Anton Fürst von Kaunitz）の秘書兼蔵書司書としての職を得るかたわら、その後、19世紀初頭まで、多くの作品を世に送り出した。

未曾有の出版ブームにおいて、単に読者の受けだけを狙う、日和見的な「偽啓蒙主義者」が横行した中で、ベツルは、啓蒙主義に関する確かな知識と理解を持った、数少ない作家の一人であった。とりわけ、『ファウステイン』（1783年）⁽¹⁹⁾、『モロッコ人の手紙』（1784年）⁽²⁰⁾などの作品は、作者が、厳格な検閲制度が健在だった時代からすでに、フランス啓蒙主義の著作に深く親しんでいたことを示唆している。すなわち、前者はヴォルテールの『カンディード』（1759年）⁽²¹⁾を、後者はモンテスキューの『ペルシャ人の手紙』（1721年）⁽²²⁾をモデルに採った、というよりむしろ、両作品のパロディ、いわば、「ウィーン版」というべき著作である。だが、これらの作品が、単なるパロディを超えた魅力を具えていたことは、例えば『ファウステイン』が、出版後わずか5年で8版を重ね、多くの翻訳を通じて全ヨーロッパで広く読まれたことにも端的に現われている。⁽²³⁾

ベツルの『ウィーンのスケッチ』（以下『スケッチ』とする）は、1786年から90年にかけて、6分冊で刊行された。このとき、81年に始まったパンフレット・ブームは、一応の収拾をみていた。この時期のパンフレットの特色は、都市の事件など、個別的・断片的なテーマを扱う著作に代わって、都市の概観を把握しようとする、集大成的な作品が現われたことである。⁽²⁴⁾ 年間に発行されるタイトル数は著しく減少したが、個々のパンフレットのページ数は逆に増大し、単発ではなく、『スケッチ』のように、長期にわたる刊行形態が定着していった。

【スケッチ】は、1780年代後半の「集大成パンフレット」を代表する作品である。その序文の中で、ベツルは、都市描写の作者としての態度を、明快に表明している⁽²⁵⁾。すなわち、ここで彼は、まず、作家の視点の「客観性」を正面から否定する。かつて地誌や旅行記においてウィーンを描いた作家たちを引き合いに出し、彼等がそれぞれ「自分の眼鏡（＝主観）」を通じてこの都市を見つめたことを指摘しながら、ベツルは、「彼等に倣って、私もまた、少々歪んだ見方をしてみようとおもう⁽²⁶⁾」と、考察の地平に自らの主観の視座を据える。さらに、ベツルは、主題として、ウィーンの地理や歴史ではなく、「今日の風俗習慣の色合い、現在、支配的になっている思想・概念、国民の精神的状況」を取り上げることが強調した⁽²⁷⁾。これらは、まさに、都市の中に「永遠の像」を追い求め、地理・地形、歴史的建造物など、時を経てもほとんど変化しない対象に描写の重点を置いた、伝統的な「歴史的地誌」の形式からの決別宣言にほかならない。

こうした手法を、ベツルが、ルイ・セバスティアン・メルシエ（Lois Sébastien Mercier）による【パリのタブロー】（1776年⁽²⁸⁾）に学んだことは、ほぼ間違いない。メルシエの作品は、刊行以来、全ヨーロッパで熱烈な支持を受け、1873年には最初のドイツ語訳も出版された。「人々が既に描き尽くした建物や寺院、記念碑など、パリの見どころを並べ立てるのではない。生きたパリの姿を描きたいのだ。公的・私的な風俗習慣、時代精神、……また、大都市の狂気じみた富や豊楽を！」⁽²⁹⁾というメルシエの序文には、ベツルの序文の原形を読み取ることができる。また、フランス語の“tableau”に即して、“Skizze”という語をタイトルに採ったところにも、ベツルに対するメルシエの強い影響が認められる。

客観的、普遍的な立場を取って離れ、無常迅速な都市のありさまを活画のように生き生きと描く行為を通じて、大都市の生きた全体像を捉える。メルシエが確立したこの「タブロー」という都市描写の形式を、ドイツ語圏で初めて体系的な形で受け継いだのが、ベツルであった。ベツルの作品の後、ド

イツ、オーストリアの諸都市に関する「スケッチ」が試みられ、ドイツにおいて、メルシエの「タブロー」に対応するものとして、「スケッチ」が、近代的「都市描写」の形式として定着した⁽³⁰⁾のである。

「都市描写」としてのペツルの『スケッチ』は、このように、単なる郷土文化の枠組みを超えて、同時代のヨーロッパ文化史との関連の中で評価されるべき作品である。ただし、ここでは、主として前節で掲げた問題提起に沿って、ウィーンの啓蒙主義という、あくまで限定された視点から、内容の分析を進めたい。

(2) 「大都市」へのまなざし

ヨーゼフ 2 世時代のパンフレットは、都市とその生活を題材に辛辣な社会風刺を展開したという点で、バロック期の説法文学、愚者風刺の形式を踏襲するものとみなし得る。説法僧の手になることが多いこれらの作品は、どれも、都市住民の墮落した生活をユーモアを交えて描き、最後に、読者に対して、こうした生活を悔い改めるべく説くのである⁽³¹⁾。とりわけ、作者が激しい非難を投げかけたのは、人々の無為な生き方であった。バロック期のウィーンを代表する風刺作家、アブラハム・ア・サンクタ・クララ (Abraham a Sancta Clara) は、侮蔑と怒りを込めて書いた。

「喰らい、呑み、うろつき回る
放歌して、口笛を鳴らし、仲間を嘲る
愚劣に所作もなく徒らに刻を費やす
もし、これらが一切禁じられるなら
なし得ることはもはやただひとつ
当所^{あてど}なく街の外へと彷徨い出るのみ」⁽³²⁾

人間の生活はすべて労働と信仰に捧げられるべきものとされた時代の中で、食事以外の飲食や、歓談、散歩などの行為は、「無為 (Müßiggang,

Muße)」として括られ、「無為の人、怠け者 (Müßiggänger)」は、十戒を犯す者と同じく、罪深い存在とされた。そして、都市は、無為に満ちた、罪業の場所にほかならなかった。

ペツルの「スケッチ」を、これまでのあらゆる「都市描写」から際立たせるのは、まず、なによりも、都市を見つめる作者の眼が、従来の否定的視点を完全に脱している点である。1786年に出された『スケッチ』の第1号で、ペツルは、まず、都市の面積や構造、人口等を概観したあと、「大都市に関する弁明」という章題のもとに、伝統的視野に対抗する、独自の「都市へのまなざし」を打ち出している。すなわち、法律、商取引、芸術、学問、思想、社交など、「人間幸福の真なる根源」が、大都市の存在と切り離せないものであることを指摘して、⁽³³⁾ペツルは次のように述べた。

「大都市だけが、私たち人間の力を養ってくれる。私たちが精神ある存在であることに気付かせてくれ、そして、自分の狭い部屋から足を踏み出し、大勢の人と交わって、多くの善行を積むための機会と活力を与えてくれるもの、それが、大都市なのだ。」⁽³⁴⁾

こうした都市に対するポジティブな見方、都市そのものを賞賛する態度こそ、『スケッチ』を旧来の「都市描写」から大きく分かつ、最大の特色にほかならない。とりわけ、都市の繁栄の歴史や、大聖堂・王宮など、権力を象徴する建造物ではなく、都市の生活様式や風俗・習慣そのものを評価の対象とする視点は、まさしく画期的なものであった。

都市を見つめる視点の決定的な転換は、バロックの説法僧が激しく嫌悪した「無為」・「無為の人」の描写において、最も顕著な形で表出する。ペツルはいう。

「無為の人! 時間を潰すという彼等の難題を、これほど容易に解決してくれる都市は、……ウィーンを除いてほかに無いだろう。これほど快適に、娯楽や見世物や憂

さ晴らしを次々にはしごできる場所が、ほかにどこにあるというのだ。……実際、ウィーンで、心地よく無為に耽ることの出来ない者は、哀れである……⁽³⁵⁾」

「無為の人」とは、働くためではなく、楽しむため、贅沢をするために生きる人々であった。その筆頭に、ベツルは、若くして広大な地所や莫大な遺産を相続した「幸運児」を数えている。⁽³⁶⁾ サンクタ・クララならば即座に贖罪を迫ったであろうこれらの人々も、ベツルにとっては、あくまで「運命の不可思議さ」を物語る証左、大都市の多様性の一構成要素に過ぎず、決して批判の対象とはならない。

こうしたベツルの姿勢は、ともすれば、奢侈・享楽を無闇に肯定する、短絡的な楽天主義として誤解されかねない。しかし、一方で、作家は、都市生活の弱点を明敏に見抜いてもいたのである。「気取り屋の男女」と題した章で、ベツルは、同時代の風刺作家、ヨーゼフ・リヒター（Joseph Richter）の、「身も心も備えた平凡なウィーン人」（1784年⁽³⁷⁾）を引用しながら、ここに描かれた、流行や快楽をひたすら追いながら日々を軽佻浮薄に暮らす男女を、「ウィーンに限らず、大都市に付き物の人間のタイプ」として定義した。⁽³⁸⁾ これらの人々を、ベツルは、共感どころか、皮肉と軽蔑をもって評し、その無知とエゴイズムを厳しく批判する。

労働や信心ではなく、楽しみのために生きる生活様式に関して、ベツルが時によって著しく不整合な立場をとるのはなぜか。「気取り屋」に関する一節には、これを解明する鍵が隠されている。作家は、まず、この愚かな人々が、快楽を追及するあまり、有益な知識や教養から一切隔絶しているところに、その最大の問題点を観取する。そのあとで、彼は、「ウィーンは、自己完結した世界である」と指摘する。⁽³⁹⁾ 都市住民は、決まったサイクルの中で寝起きし、働き、そして大いに楽しむ。多くの人々は、このサイクルが乱されない限り、つまり、美食や遠乗りの楽しみが邪魔されない限りは、都市の外で何が起ころうと、一切関心を示さないのである。人々の視野は狭く、その

知識と教養が広がりを見せる可能性は、ほとんど望めない。⁽⁴⁰⁾

ベツルが「気取り屋」を責めるのは、彼等が不信心で、宗教的戒律を破るという理由からではなく、知的欲求と精神的高揚への志向に著しく欠けているためである。そして、逆に、知識、教養、自己修養と結び付くならば、かつて「無為」として激しく攻撃されたはずの様々な行為は、積極的に推奨されるべきものとなる。「無為」・「無為の人」を、バロックの説法僧とは全く異なった地平から観察するベツルのスタンスは、彼が、しばしば「無為の人」と並列して用いる、“Philosoph”という語の中に、極めて象徴的な形で現われている。

いうまでもなく、ベツルがいう“Philosoph”とは、いわゆる「哲学者」ではなく、フランス啓蒙主義が“philosophe”という語によって定義したような、「人間精神を隷属させる、既成の権威や旧来の偏見・因習を克服して、自分自身の頭で考える者」⁽⁴¹⁾、つまり、理性の力によって、人間の本質、社会的存在としての人間、さらにはそれを取り巻く自然界の法則を理解しようとする人々を指す。ベツルは、「大都市は、“Philosoph”にとっての真の根城である」とした上で、さらに、ポープの箴言、「人間にとって、真実の研究対象は人間自身である」を引く。⁽⁴²⁾すなわち、“Philosoph”が理性による自律的思考を行うための第一歩は、まさに「人間観察」にある。そして、「人間をあらゆる側面からこれほどまでにじっくりと研究できる場所は、当然のことながら、莫大な数の人間を抱えた巨大な首都以外には無い」⁽⁴³⁾。こうしたコンテキストで、ベツルは、『スケッチ』を通じて、様々な場面に“Philosoph”を登場させる。着飾った散策者でごった返す日曜日の広場や、朝の化粧室での貴婦人と女官の秘密の会話を描いては、これらを「“Philosoph”にとっては垂涎の観察対象」とするのである。⁽⁴⁴⁾

特に定まった職も持たず、昼間からカフェや広場に座って周囲の人間の言動を「観察」する。“Philosoph”のこうした行為は、明らかに「無為(Muße)」である。しかし、こうした「無為」を通じてこそ、人間は、自ら

の精神を高揚させ、理性の力を高めていくことができるのだ。このように、ベツルにおける「無為」は、サンクタ・クララとは本質的に異なる用語法に基づくものであった。

ヴォルフガング・ナーシュテット (Wolfgang Nahrstedt) は、余暇概念成立に関する研究の中で、“Muße” という語の意味が、キリスト教的労働概念の形成に伴って大きく変化したことを指摘した。⁽⁴⁵⁾ すなわち、すでにアリストテレスにおいて見られる“Muße” の概念は、もともと、貴族・家長など、労働を免除された人々だけが享受し得る特権を意味していた。“Muße” の枠組みの中で、人々は、教養を積み、自己修養に役立つさまざまな娯楽に興じ得た。ところが、人間の存在意義を「神への奉仕」として定義づけ、労働をこの奉仕の重要な部分とみなしたキリスト教的世界観によって、“Muße” に関して、「非労働」すなわち「無為」という、極めてネガティブな読み替えがなされたのである。

そして、ベツルの“Muße” が、むしろ、キリスト教以前の用語法で用いられたことは、いうまでもない。幸いにして労働の義務から解放された「幸運児」、時間的自由を享受する恵まれた人々は、“Muße” の特権を行使して、例えば「人間観察」を通じて、自己啓蒙に努めるべきであった。そして、そのための最適の場所が、都市にほかならなかった。

ベツルはさらに、都市には、“Philosoph” が「人間観察」からさらに一步を踏み出すための、様々な可能性が用意されていることを指摘する。すなわち、

「彼 (= “Philosoph”) がもし、観察対象である雑踏から目を転じ、少数の選り抜かれた人々からなる、類い稀なサークルの中で、その無為の時間を過ごそうと望むなら、……それも叶えられるのだ。ここでは、友情のもとで、真実と誤謬について、光と陰について、……誰もが自由⁽⁴⁶⁾に、忌憚なく語り合う。」

ベツルはこのとき、いうまでもなく、啓蒙主義の重要な担い手となったア

ソシエーションや結社を念頭に置いているのである。別の箇所でも、また、作家は、大都市における会話術の重要性について触れ、人々は、様々なサークルの中での洗練された会話や議論を通じて、知識を広げ、思考訓練を積んでいる、と述べる⁽⁴⁷⁾。

自然や人間を観察し、そこで認識したものを、仲間と語り合い、議論することによって、合理的思考様式を身につけ、また、互いに情報交換を行うことで、知識と視野を拡大し、教養を深めていく。いうまでもなく、これは、啓蒙主義が理想とした、人間の自己修養プロセスである。そして、大都市には、そのためのすべての段階、すべての可能性が存在することを、ペツルは強調する。

「大都市万歳！都市は、粗野で無教養な人々を、真の人間に変えるのだ！」⁽⁴⁸⁾

カウフマンが指摘するように、ペツルは都市の存在を、「高貴な人間性と文化的発展のための、すなわち啓蒙主義展開のための大前提」⁽⁴⁹⁾とみるのである。修道院の教育システムの中に身を置きながらも、若くして啓蒙主義に深く親しんだペツルにとって、大都市、とりわけヨーゼフ2世下のウィーンは、まさに啓蒙主義的「知」の中心にほかならなかった。オーストリアを中心とする南部ドイツが、カトリック教条主義の因習から解放され、ここに啓蒙主義が浸透していく過程は、大都市ウィーンのイニシアティブのもとにこそ初めて可能になるはずであった。

作者ペツルの都市に対する新しい視点の根源に通底項として横たわっていたのは、まさに、『ファウステイン』の中で吐露された啓蒙主義への熱狂であった。カトリックの説法僧にとっての「悪徳の牙城」は、いまや、「啓蒙のステージ」として眺められたのである。

(3) 「啓蒙」の実現過程—都市の娯楽と生活様式

啓蒙主義的な見地から、新たに精神的修養のための有効な手段として意味づけられた「無為 (Muße)」は、さらに、「気晴し (Zerstreuung)」, 「娯楽 (Vergnügen)」などの語と結び付いて、【スケッチ】の中心的な主題へと発展する。住民の様々な娯楽の情景は、【スケッチ】における都市風俗描写の大きな部分を占めている。都心部のグラーベンを散歩する洒落者たちを、郊外の道化芝居に通う人々を、また、夏の夕方、稜堡上に店を出した瀟洒なレモネード・スタンドで氷菓を楽しむ婦人たちを、ベツルは、実に生き生きと、魅力的に描いてみせる。

とりわけ、庶民について描写した箇所は、⁽⁵⁰⁾ こうした「無為」、「娯楽」の習慣が、都市住民の間に定着するプロセスの一端を呈示している。ベツルはここで、まず、庶民の啓蒙を妨げる要因として、いまだに彼等が教会や修道院に対して盲信的な態度で接していることを指摘した。啓蒙主義者として、当然、ベツルは、カトリック教会の蒙昧主義や修道院の存在に強く反発した。数世代にわたり、ジェズイット教団が教育・文化を支配した結果、いまだに様々な形で迷信と因習が残存していた状況こそ、ベツルが、都市ウィーンの最大の弱点と見るところであった。ベツルは読者に呼びかける。

「祝祭行列を廃止し、(パンフレット作者たちが) 説法に対して厳しい批判を投げかけるようになってからも……、この世のすべては順調だし、われわれはかつてと同様に庇護され、満ち足りて暮らしていることに目を向けたまえ。そして、つまらない迷信など、忘れてしまうのだ。……修道僧から説法を受ける時間が長く感じられるなら、その時間に友人を訪ね、仕事や家の切り盛りについて語り合うがよい。懺悔を迫る坊主たちの言葉より……、その方がずっと有益なはずである。⁽⁵¹⁾」

こうして、盲信を捨て、日曜日ごとの説法を世俗的な談話によって置き換えよ、と説いた直後に、ベツルは次のように続ける。

「しかし、実は、ウィーンの庶民は、ご馳走やダンス、見世物や気晴しが大好きだ。祝日に、プラター、アウガルテンへと繰り出しては散策し、駆り立て獵の見世物や花火に通う。家族を連れて郊外に遠乗りをし、豪勢な料理を注文する。こうしたことを極悪非道な大罪だと決めつける人もあろうが、私の目には、大いに結構なこととして映るのだ。⁽⁵²⁾」

二つの文章のコンテクストからみて、ベツルは明らかに、説法や礼拝などの宗教的習慣と「無為」とを、対立概念として、しかも、民衆がどちらかを選び取るべき、一種の選択肢として想定しているといつてよい。ここで、18世紀以前のヨーロッパにおいて、宗教的儀式や行事への参加が、娯楽や余暇としての社会的機能を果たしていたことを想起したい。⁽⁵³⁾ ほぼ日照時間に匹敵する長い労働時間と単調な生活パターンの中で、例えば、日曜日の礼拝は友人と出会い歓談する場を、巡礼は郊外への遠足の機会を、また、祝祭はスペクタクルの舞台を人々に提供した。これらは、当時、誰もが平等に享受し得た、唯一の娯楽の可能性を意味したのである。そして、ベツルが、旧来の宗教的習慣に対抗する選択肢として、かつて厳しく咎められた「無為」の行動の数々を挙げるのは、もはや教会の催事の中に娯楽を求めなくなり、代わって、これら「無為」を、新しい娯楽のパターンとして、次第に生活の中に定着させていった、都市生活の現実を反映してのことにはほかならない。

礼拝や説法、巡礼を敬遠して、遠足や見世物に出かけるという、新しい生活様式は、当時の都市社会に確実に浸透しつつあった。ベツルは、日曜日の朝、聖堂の正面入口がいまだに馬車や人で混雑する様子を描きながら、その一方で、日曜日や祝日、教会に立ち寄ることなく、早朝のうちに都市を出発し、郊外で一日を過ごすという習慣が、すでに一部で定着していたことに、好意の目を向ける。⁽⁵⁴⁾

こうして、教会や修道院が、都市の日常生活に対する影響力を喪失していく過程を、ベツルは、四旬節についての描写の中でも、鮮明に浮き彫りにしてみせる。かつて、精進期間として厳しい食事制限が課されていた復活祭前

の期間に、すでにウィーン人たちは、普段と同じようにロースト・チキンを楽しむようになっていた⁽⁵⁵⁾。さらに、「精神生活もまた、(こうした食生活上の変化に) 倣う⁽⁵⁶⁾」のである。すなわち、それまで四旬節の間は閉鎖を義務づけられていた都市の劇場に対して、1786年、通常の公演が許可された⁽⁵⁷⁾。そして、ベツルが鋭く見抜いたように、四旬節の肉食や観劇を許可した教会と政府の背後には、なによりも、都市住民の間に、精神的な、あるいは生活様式上の変化が、着実に進行していたという事実があったにほかならない。上からの許可を待つまでもなく、人々はすでに、四旬節の期間内に現世的な快楽を享受することに対して、何ら信心の咎めを感じなくなっていた⁽⁵⁸⁾。

このように、18世紀後半のウィーンでは、「娯楽」という概念、それをめぐる習慣が目ざましい転換を見せつつあった。しかし、この大転換は、けっして自生的に現われたものではなかった。われわれは、ここに、ヨーゼフ2世による、綿密に計算された政治的意図を看過してはならない。

マリア・テレジアとの共同統治期からすでに、ヨーゼフ2世は、教会、なかでも宗教的祝祭と結び付いた娯楽や余暇の在り方を疑問視していた。とりわけ争点となったのは、当時、労働と余暇とが未分化で、互いの間にいまだ明確な境界線をもたなかった中で、祭礼はもちろん、曜日を問わず、信者に対して参加を義務づける礼拝が、人々の労働を中断させ、生産性を低下させていた状況であった⁽⁵⁹⁾。このことは、国力増強を狙う統治者にとって、早急に克服されるべき課題であった。反教権主義的かつ重商主義的な視野から、ヨーゼフ2世は、祝祭日や礼拝の削減を導入するとともに、キリスト教的世界観から切り離された、また、労働時間から厳密に区別された形での余暇と娯楽の在り方を模索したのである。

厳しい労働の「ガス抜き」としての社会的機能を負いつつ⁽⁶⁰⁾、しばしば無秩序と放埒に陥った旧来の娯楽パターンに対して、新しい、世俗的な娯楽は、理性と節制をもって営まれるべきであった。それは、労働の疲労から人々の心身を回復させると同時に、その精神をより高い次元へと高揚させなければ

ならなかった。⁽⁶¹⁾これこそ、啓蒙主義を標榜した「哲学王」、ヨーゼフ 2 世の理想であった。その実現のために、彼は、劇場や読書クラブを保護し、ハプスブルク家の芸術コレクションの一部を一般に公開し、さらに、プラーター、アウガルテンという、二つの帝室私有地の広大な緑地を一般解放したのである。

なかでも、緑地解放は、都市に新たな流行を生み出した。すなわち、散策の習慣である。かつて、サンクタ・クララが、「無為」の代表格、礼拝や労働を蔑ろにする行為として激しく弾劾した「うろつき回る」こと、すなわち「散策 (Spazierengehen)」は、都市住民が、社会的・経済的条件にかかわらず気軽に享受し得る、最大の娯楽として人気を博した。⁽⁶²⁾プラーター、アウガルテンをはじめ、散策者が集う緑地や広場が、のちに、飲食やダンス、花火など、様々な要素を統合しつつ、新しい余暇と娯楽の結集地へと発展していった様子を、『スケッチ』は詳しく伝えている。⁽⁶³⁾

ウィーンの新しい都市生活の典型として、散策の情景をしばしば取り上げたベツルは、その背後に横たわっていたヨーゼフ 2 世の啓蒙主義的な意図を、明確に意識していた。日曜日に都市の広場を散策する人々の姿に、ベツルは、一種の「啓蒙の理想系」を見い出そうとする。

「日曜日に、都市の広場を避けて通ろうとするのは、よっぽどの変わり者だろう。なぜなら、これらの場所には、日曜日ごとに、数多くの陽気な人々が集い来るからである。そして、心から楽しむこれらの人々の姿は、賢明で、人間を愛する者の目に、この上なく美しい情景として映るのだ。」⁽⁶⁴⁾

人々が、散策をはじめ、かつて「無為」というネガティブな概念で括られた、さまざまな娯楽を受け入れ、これを心底から享受するさまは、「賢明で、人間を愛する者」、すなわち、啓蒙主義者に対して、最大の満足を与えるものであった。なぜなら、都市住民が、盲信を捨て、新しい世俗的な生活様式を受容していくプロセスは、彼等にとって、都市における啓蒙主義の実現過

程そのものを意味していたからである。娯楽や生活様式上の変化の数々を、ベツルは、ヨーゼフ2世が掲げた啓蒙主義が、“Philosoph”や一部の知的エリートなど、限られた狭いサークルを超えて、庶民層に至るまで、都市生活の隅々に迅速に浸透した事実の標徴として描いたのであった。ヨーゼフ2世の治世下に身を置くことへの憧憬に駆られてウィーン入りした作家は、こうして、この地に「啓蒙の理想都市」の像をみようとしたのである。

(4) プロパガンダとしてのパンフレット

—「ウィーンのスケッチ」の史的価値

ベツルが求めた「啓蒙の理想都市像」は、さらに、彼が、是非とも実現されるべき課題として提示した多くの提案の中に、より鮮明な輪郭をもって表出する。「提案」という章題のもとで、彼は、首都に「都市美化委員会」を設置し、誰もが都市に有益な提案、助言を公表できる制度を立ち上げるべきだ、と主張する。⁽⁶⁵⁾その上で、ベツルは、彼自身の「提案」を列挙する。住民がより気軽に散策を楽しめるよう、市内の多くの広場を緑地化する。交通の障害となるばかりではなく、美観を大いに損なう露店商の屋台を撤去する。特に、悪臭を放つ肉屋の屋台は郊外へ移転させる。市門と道路の幅を拡大し、馬車の通行の円滑化を図る。市内に残存する修道院をすべて廃止し、修道服を追放する。……一見、思いつくままに浮かんだアイデアを、脈絡もなく列挙したかに見えるこれらの「提案」は、しかし、実際には、確固たるイデオロギーによって貫かれていた。

都市の衛生を損ない、悪臭を放ち、人馬の通行を妨げ、騒乱へとつながりかねない喧騒を生み出す諸要素、さらに、伝統的に都市の特質の基礎を形成していた土俗的・民衆的生活形態を駆逐することは、啓蒙専制君主に共通の志向であった。⁽⁶⁶⁾ヨーゼフ2世もまた、その例に漏れず、都市という、元来、混沌としたエネルギーを内包する有機体を、完全に自らの管制下に置こうと企図したのである。そして、彼にとっては、首都に残存する修道院もまた、

自らの管理体制を妨げる要因のひとつであった。⁽⁶⁷⁾すなわち、ペツルが実際の広場や道路の具体的な名称を挙げて指摘する計画案は、まさに、皇帝が抱いた首都の理想像を、現実に移す手段となるべきものであった。「スケッチ」における都市の理想像は、ヨーゼフ2世が抱いた「理想の首都像」の投影として描かれたものである。そして、ここに、皇帝とその政府を支持する作者の基本姿勢が発現する。

さらに、ヨーゼフ2世の諸政策、とりわけ、その教会政策や寛容令⁽⁶⁸⁾、保護貿易主義等⁽⁶⁹⁾に触れるとき、体制に対するペツルの肯定的態度は、より瞭然となる。首都で試みられた革新的な措置の数々が、特に混乱もなく、円滑に実現していったことを指して、ペツルは、国家の安定性をことさらに強調する。たとえば、彼は、ヨーゼフ2世下の言論・出版の自由は、「自由国家」と呼ばれたヴェネチアやジェノヴァなどの共和国を大きく凌ぐものであったと述べる。⁽⁷⁰⁾

「ウィーンでは、現政府のもとで、自由な発言を警察に咎められた例はない。このことは、疑いもなく、この点（＝言論の自由）に関する政府の飽くまで賢明な姿勢を示す証左である。これは政府にとって非常に名誉なことであり、かれらはその利点を十分に認識しているのだから、この方針はこれからも保持されるに違いない。」⁽⁷¹⁾

ペツルはいう。支配者の人格、政治、宗教は、国家が永続するための3つの要である。現在、帝国では、ヨーゼフ2世の優れた人柄、政治の機密性、宗教的寛容によって、この3つがしっかりと支えられている。たとえ、血迷った輩が戯れに大胆な発言をしようとも、これを恐れる必然性はここには全くない。これを取り締まるよりも、自由で知的な議論を奨励したほうが、政府にとっては得るところが大きい。⁽⁷²⁾

このようにして、ペツルは、内政、外交ともに稀にみる安定状態の中で、啓蒙主義がいかにして国民生活の中に深く浸透しているか、宗教的寛容がいかに徹底して進められているか、その例を悉く数え連ねるのである。この点

で、『スケッチ』は、まさに、ヨーゼフ2世による改革政治の成果そのものに関する、多様で具体的な分析の試みとして評価し得る作品なのである。⁽⁷³⁾いまだに根強く残るバロック時代の慣習を鋭く批判しながら、諸改革の成功を賞賛をもって描出し、同時に未来への提案を投げかけるベツルの視野は、過去から現在、さらに未来へと貫く、ウィーンの啓蒙主義の軌道を捉えようとするものにほかならない。

だが、ベツルの描写が当時の現実との間に大きな齟齬を来していたことは、いまさら帝国史に照らすまでもなく、自明なことである。妥協を嫌うヨーゼフ2世の頑なな態度は、内外ともに大きな摩擦を引き起こし、『スケッチ』が発行された1780年代後半には、皇帝は政府内でも次第に孤立を深めていた。帝国の状況は、安定からは程遠いものであった。こうした作品成立の時代背景を考慮するとき、改めて、『スケッチ』の、一種のプロパガンダとしての性格が浮上してくる。そして、このことは、とりわけ、この作品を歴史史料として認める視点を危ういものにする。ベツルの描写の分析を試みるとき、われわれは、常に、ヨーゼフ主義、啓蒙専制主義というフィルターを通して、当時の都市社会と対峙していることを意識しなければならない。

しかし、また、これは、ベツルだけでなく、18世紀ウィーンの作家と文芸作品全体に共通の問題でもある。周知のように、マリア・テレジアのもとで大量に発行された道徳週刊雑誌の作者は、ゾンネンフェルス（Joseph von Sonnenfels）をはじめ、多くが現役の国家官僚であった。⁽⁷⁴⁾啓蒙主義を信奉し、女帝の諸改革を全面的に支持した彼等は、1761年、「ドイツ協会」を設立し、啓蒙主義を広く社会に伝播させる目的で、私財を投げうって雑誌発行に打ち込んだ。さらに、パンフレット・ブームにおいても、ヨーゼフ2世の教会政策の美点を喧伝し、修道院や聖職者に暴言をぶつけた作者の間に、政府から報酬を得ていた者があった事実が、先行研究によってすでに指摘されている。⁽⁷⁵⁾

ベツルに関しては、彼が政府の「雇われ作家」であったという事実は、一

切確認されていない。しかし、マリア・テレジア、ヨーゼフ2世の2代にわたって側近を勤めたカウニッツ侯爵の秘書として、さらにその後、政府の暗号局長としてのペツルの地位は、おのずから、作家の政府に対する態度の在り方を示唆している。

啓蒙期ウィーンの文芸、とりわけ散文作品に関する研究の先駆者、レスリー・ボディ（Leslie Bodi）は、ヨーゼフ2世下の文学と出版の状況を、適切にも、決して長続きしない、春先の雪解け陽気に例えた。⁽⁷⁶⁾ボディの比喻は、啓蒙専制主義そのものが内包した本質的矛盾を、巧みに言い当てたものである。マリア・テレジアもヨーゼフ2世も、その検閲緩和と文芸保護政策において、明らかに、「文学の政治的利用」を意図していた。文学を、改革政治を喧伝するメディアとして利用するという試みは、官僚作家による道徳週刊雑誌の発行において、最も理想的なかたちで実現された。しかし、文芸批評や文学は、いうまでもなく、本質的に、政府の管制能力を遥かに凌ぐ、アナーキーな批判性を含んでいる。とりわけ、啓蒙主義を全面に打ち出したヨーゼフ2世は、啓蒙主義的な「自由な議論」を推奨しながら、一方で反政府的な急進主義を抑え込むという、本来、解決不能な逆理の課題を常に抱え込むことになった。

啓蒙主義者としての理想と絶対主義的統治者としての立場の間で、ヨーゼフ2世が決して一貫した態度を保持できなかったことは、同時期の出版物に確認される、一種の二重基準が証明するところである。例えば、公式には検閲を通り得ないような著作に対して、検閲官、あるいは時には皇帝自身が、出版地を国外の都市に偽らせた上で、その出版を許可するという措置が、当時、日常的に見られた。⁽⁷⁷⁾政府が許可を与えたという事実を隠蔽するのが、その目的であった。

今日、パンフレットに関する研究の最大の障害となっている出版地の偽称は、当時の作家が置かれた、著しく微妙な状況を象徴するものである。ヨーゼフ2世の絶対主義的な国家観、そして、官僚的検閲制度のもとで、確かに、

作家たちにとっての表現の自由は、著しく限定されたものであった。しかし、一方で、ある種の方法を利用することで、その限界を踏み越えることも、現実には不可能ではなかった。政治・宗教など、厳禁のテーマや、急進主義であっても、それを掩蔽する姿勢が認められる限り、検閲局は、あたかも作者の本意を認め得なかったかのように装って、出版を許可したからである。出版地や著者名の隠匿、あるいは、架空の原作者を挙げて翻訳を偽るなどは、この「裏技」の典型的な例である。さらに、出版ブームが続く中で、作家や作品が次第に成熟度を高めるにつれ、こうした外面的手段ばかりでなく、作品の中にも、検閲のボーダー・ラインに挑戦するための、様々なテクニックが編み込まれるようになった。異国のメルヘンやイソップ風の動物寓話、リンネの博物学を下敷きにした奇妙な「辞典」など、さまざまな政治・社会批判を隠蔽して、文学の技巧と形式はますます複雑化していった。⁽⁷⁸⁾

与えられた枠組の中で、既成の制度に危機を及ぼすことなく、いかにして自由な議論を展開していくか。これこそ、ヨーゼフ2世下の作家たちに時代が課した難題であった。そして、『スケッチ』の中にもまた、作者ベツルが、熱心なプロパガンダ行為と並行して、他方で、社会批判、体制批判の可能性を探ろうとした痕跡が認められるのである。例えば、カトリック教会に対する批判など、際どい話題に触れるとき、架空の原典から引用を行うベツルのやり方は、当時の作家たちが好んで用いた技法である。⁽⁷⁹⁾ さらに、ヨーゼフ2世による、悪名高い「木棺禁止令」⁽⁸⁰⁾ について、筆者の立場を一切明らかにすることなく、この措置が撤回されるまでの過程を淡々と報じ、⁽⁸¹⁾ また、信仰に関しても、具体的な政策に触れることなく、(ヨーゼフ2世が導入した)宗教的寛容と信仰の自由が本質を異にすることをほのめかすレトリック⁽⁸²⁾ は、まさに、ベツルなりの、「限界への挑戦」とみるべきであろう。

ベツルの最大の「挑戦」は、しかし、「利己主義」の章題のもとで試みられた、ヨーゼフ2世に対する明らかな個人攻撃である。自己中心的な言動をとり、他人から利益を引き出すことしか念頭にない人間が増えた、とベツル

は嘆く。

「……率直に言おう。今日の王たちの思考・行動様式こそが、一般人の利己主義をますます強めているのだ。」⁽⁸³⁾

「皇帝 (Kaiser)」という語を避け、「王 (König)」、「君主 (Souverän)」を、しかも複数形で使うことで、批判の対象はカモフラージュされている。しかし、「寛容と気前の良さに欠け、儉約、節制、撤廃政策にのみ汲々とする」⁽⁸⁴⁾というベツルの非難を一目見れば、首都を彩る年中行事の数々を廃止し、王宮の大広間にまで釘を打ったヨーゼフ2世の吝嗇を快く思わないウィーンの人々は、作者の本意をすぐに悟ったに違いない。まさに、当時の検閲の「暗黙のルール」に即した、正統的な体制批判の事例である。

このように、「スケッチ」は、ヨーゼフ2世下のパンフレットの本質に関わる、あらゆる特徴を内包する作品である。一方で政府に対するプロパガンダを、他方で体制批判のための様々なテクニックを巧みに弄しながら、作家たちは、微妙なバランス状態の中に創作を続けた。そして、いまだ健在な検閲制度と急激な規制緩和との力の引き合いが形成した、この奇妙な磁場は、1780年代のウィーンにおいて、文学だけではなく、あらゆる芸術作品にとって、第一の成立条件となっていた。エンゲルハルト・ヴァイグル (Engelhard Weigl) が挙げる、モーツァルトのオペラ、『フィガロの結婚』上演許可のプロセスは、その最も典型的な例証であろう。⁽⁸⁵⁾ベツルの「スケッチ」に関して文化史的アプローチを試みるためには、まず、18世紀末のウィーンがおかれた、この特殊な状況を前提としなければならない。ヨーゼフ2世下の検閲制度はもちろん、作家たちの間で常套となっていた寓意やレトリックを理解することを通じてはじめて、この作品を、単に、都市風俗の克明な描写としてではなく、当時の都市文化の状況そのものを伝えるドキュメントとして読む視点が可能になるからである。

3. おわりに

1790年、6号をもって完結した『スケッチ』の後、ベツルは、再びウィーンに関する「都市描写」に着手し、1805年から、断続的に「新ウィーンのスケッチ」を刊行した。⁽⁸⁶⁾旧作品の続編であるかのタイトルを冠した『新スケッチ』は、しかし、ベツルが大きな転換点に立たされていたことを示唆する作品である。すなわち、ここで作家は、もはや都市を肯定的に評価しようとはしない。莫大な人口、郊外部への拡大、また、都市生活の豊楽など、『スケッチ』では都市の豊かさの象徴として描いた諸要素を、ベツルはここで、人間の幸福な生活を脅かすものとして批判した。

さらに、1802年に出版された『首都ウィーンに関する概観と描写』⁽⁸⁷⁾において、ベツルは、社会描写そのものを放棄したのである。都市の地形、面積、産業の状況、税制等を、一切の主観を交えずに解説するこの作品は、作家にとって、まさに、伝統的な歴史的地誌への回帰を意味するものにほかならなかった。

都市描写作家としてのベツルの転機となったのは、1790年2月20日、皇帝ヨーゼフ2世の崩御であった。皇帝の死を境に、文芸・出版はもちろん、首都の社会、文化をめぐる状況が一変した。都市そのものが一大転換を遂げる中で、もはや、1780年代の地平からこれを眺めること自体、不可能になっていたのである。

18世紀のドイツ諸都市と啓蒙主義に関して、ヴァイグルは、明快な議論を展開している。⁽⁸⁸⁾中世以来、ツンフトや市民団を中心に、排他的な社会を形成してきたドイツ都市は、外部からの人口流入とともに、新しい思想・文化を進んで受け入れ、自らその排他性を捨てることによってのみ、近代社会に発展の可能性を見出すことができた。これらの都市は、互いに人的・精神的交流を保持しながら、大学、書籍・出版業者、フリーメーソンを中心とする結社、サロン、カフェなど、数々の「啓蒙の諸機関」を擁し、啓蒙主義の受け皿となった。

一方、12世紀以来、ハプスブルク家の宮廷都市として繁栄したウィーンは、人口や経済・産業の規模からすれば、すでに北部ドイツの諸都市をはるかに凌駕していた。また、宮廷を中心に開花した建築や絵画、音楽、そしてとりわけ演劇の分野では、すでにヨーロッパにおける中心地の一つに数えられてもいた。しかし、哲学や文学がその発展の土壌を欠く中で、ウィーンは、ドイツ最大の都市でありながら、決して啓蒙主義の受け皿とはなり得なかったのである。

ウィーンにおける、こうした文化的不均衡を、一挙に克服しようとしたのが、ヨーゼフ2世であった。⁽⁸⁹⁾ 皇帝による性急な改革の嵐に急き立てられるようにして、知識と情報の扉が乱暴にこじ開けられ、啓蒙主義の暖風が、一気に吹き込んだ。ほかの都市で約20年をかけてゆっくりと進行したプロセスが、わずか数年のうちに切り開かれようとしていた。熱に浮かされたような異様な雰囲気の中で、作家たちは「雪解けの陽気の続く間に」すべてを言い尽くそうと、時を惜しんでペンを執ったのである。

「啓蒙のウィーン」は、長い時間の中で着実に醸成されたものではなく、様々な要因が重なることで偶然に引き起こされた、一回性の特殊な状況であった。絶対主義的な世界観を保持しながら、時に、革命論すれすれの過激な風刺を擁護する、気紛れで一貫性を欠いたヨーゼフ2世の人格。マリア・テレジア以来、著しい回復を見せた国内経済。演劇文化の成熟の中で、まるで地熱のように地下にため込まれた批判精神と風刺の伝統。これらすべての微妙なバランスのもとにもたらされた、特殊な、一種の文化的「真空状態」が、皇帝の死によって一気に消滅したことは、まさに象徴的である。

ベツルが依拠した「スケッチ」というスタイルは、こうした特殊な状況の中で、文化と知的生活の中心として広い読者層の関心を集めた「都市」を描出するための、最適の媒介にほかならなかった。ベツルが描いたものは、北ドイツの諸都市から約数十年遅れて南部に開花した啓蒙主義の在り方と、その特殊性すべてを反映する都市ウィーンの姿であった。そして、この時代を

生きた作家として、彼の視点そのものもまた、所与の条件によって、様々に揺れ動く。この、時代状況との密接な関連性こそが、ペツルの「スケッチ」に、内容の点ばかりではなく、その形式や作者の立場の在りように関しても、啓蒙期ウィーンに関する歴史史料としての大きな価値を付与するのである。

その後、19世紀へ向けて、人口・面積ともに増大し、その変化のテンポを加速していく都市は、もはや、啓蒙主義のような求心的・統一的なイデオロギーでは把握し得ない存在となっていく。ヨーゼフ2世の死後、再び強化された検閲制度のもとで、「都市描写」は、視点を多重化するための書簡形式や、定期刊行制の中に、新たなスタイルを見い出していくことになる。

註

- (1) Allgemeine Deutsche Bibliothek, hrsg. v. Friedrich Nicolai, 48/1 (1781), S. 268 f.
- (2) マリア・テレジア下の検閲制度については、以下の文献を参照のこと。Grete Klingenstein, *Staatsverwaltung und kirchliche Autorität*, Wien 1970
- (3) A.a.O., S. 172
- (4) Leslie Bodi, *Tauwetter in Wien: Zur Prosa der österreichischen Aufklärung 1781-1795*, Frankfurt a. M. 1977, S. 51
- (5) この「荷物検査」に対し、ヨーゼフ2世はしばしば激しい怒りをぶつけた。Joseph II., *Denkschrift vom Zustande der österreichischen Monarchie*, Wien 1764, zit. in: Werner Maria Bauer, *Fiktion und Polemik: Studien zum Roman der österreichischen Aufklärung*, Wien 1978, S. 67
- (6) Zit. in: Bodi, a.a.O., S. 48
- (7) Joseph II., *Grundregeln zur Bestimmung einer ordentlichen künftigen Bücherzensur* (10. Feb. 1781), zit. in: Bauer, a.a.O., S. 68 f. なお、ヨーゼフ2世下の検閲に関するモノグラフとしては、Oskar Sashegyi, *Zensur und Geistesfreiheit unter Joseph II.*, Budapest 1958
- (8) ここで禁止されたのは、無神論、ポルノグラフィ、また、当時、青少年に自殺への憧憬を喚起した、Goetheの『若きウェルテルの悩み』(*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774)のほか、少数の政治的文書や、バロックの祈祷書などであった。Bodi, a.a.O., S. 51 f.
- (9) A.a.O., S. 122; なお、Bodiは、啓蒙期ウィーンの文芸に関する著作の巻末で、パンフレットの値段の比較対象として、当時の生活物資の平均価格を挙げている。それによれば、1780年代のウィーンで、小さな白パンが1個1 Kreuzer、牛乳1 Maß(約1,4リットル)が6 Kreuzer、中流の人々が食堂でとる昼食は、飲料なしで8から10 Kreuzerであった。また、Blumauerの報告によれば、10 Kreuzerが、当時、パンフレットの標準的な値段として考えられていた。

したがって、パンフレットの価格は、当時の平均的な昼食の代金と同等とみてよいだろう。

Vgl. Bodi, a. a. O., S. 441 ff.; Alois Blumauer, *Beobachtungen über Österreichs Aufklärung und Literatur*, Wien 1781, S. 5

- (10) これらのパンフレットに関する総合的なビブリオグラフィーとしては、Anton Ferdinand von Geusau, *Alphabetisches Verzeichniß derjenigen Broschüren und Schriften, welche seit der erhaltenen Preßfreiheit herausgekommen sind*, Wien 1782
- (11) Blumauer, a.a.O., S.5 ff. なお、これらのタイトルは、以下の通りである。Über die Stubenmädchen in Wien/Über die Kammerjungfern/Über die Bürgermädchen/Über die Halbfraülein/Über die Fraülein in Wien/Das Lamentabel der gnädigen Frauen/Über die Schwachheiten der gnädigen Frauen des leonischen Adels/Über den hohen Adel in Wien/Über Doktoren, Chirurgen und Apotheker/Den Hausherrn im Vertrauen etwas ins Ohr/Über die Kaufleute in Wien/Über die Dikasterianten/Über die Stutzer in Wien/Über die Kaufmannsdienner/Über die Schneider/Über die Bäcker/Über die Peruckenmacher/Über die Friseurs/ Der ehrliche Wastel mit dem Klingelbeutel/An H.S.*. Chef der Maulaffenloge auf dem Graben/Über den Kleiderpracht im Prater/Über die Unterhaltung bey der Tafel zu Schönbrunn/Über den Schwimmer aus Tyrol beym Tabor/Beurtheilung der Feuerwerke des Stuer und Mellina/Über die Hetze/Kasperl, das Insekt unsers Zeitalters/Über das Nationaltheater/Über den Mißbrauch des Wörtchen Von und Euer Gnaden/Über das Gratuliren/Über die Kleidertracht/Etwas für die schopfichten Wienerinnen/Philosophie der Modeschnallen/Über die Hochzeiten in Wien/Das Gespenst auf dem Hofe/Über den grossen Brand der Magdalenakirche/Über den Selbstmord bey Gelegenheit des Friseurs, der sich erschöß/Ist der Antichrist blau, oder grün?/Über die Bruderschaften/Über die Kirchenmusik/Über die Nonnen/Über die Tracht der Ordensgeistlichen/Über die Reliquien, Opfer und Mirakelbilder/Von Abschaffung der Weihnachtmetten/Über die Universität in Wien/Die Gelehrten im Nasenlande/Der Glückshafen für gelehrte Maulaffen/Über die zehn Kreuzer Autoren/Kaufs allerhand! Kaufs allerhand! Kaufs lang und kurze Waar!
- (12) Blumauer は、タイトルを列挙した後、これを、「都市ウィーンに関するほぼ完璧な便覧である」としている。A.a.O., S. 8
- (13) Kai Kauffmann, *"Es ist nur ein Wien!": Stadtbeschreibungen von Wien 1700 bis 1873*, Wien 1994, S. 19 ff.
- (14) これらの「古い都市描写」の伝統に関しては、a.a.O., S. 45 ff.
- (15) Kauffmann は、すでに、バロック期の説法文学、愚者風刺において、「都市描写」の伝統に一種の断層が発生していたことを指摘している。A.a.O., S. 101 ff.
- (16) すでに Blumauer は、パンフレット・ブームにおいて確実に、利潤を追及する出版業者によって、作家に対する一種の「搾取」がみられたことを指摘している。Blumauer, a.a.O., S. 45 また、出版業者の商業主義的な志向が引き起こした、パンフレットの質的低下に関する当時の議論に関しては、以下の箇所を参照のこと。Bodi, a.a.O., S. 166 ff.

- (17) 本作品のテキストとしては、以下のものを用いる。また、引用文中の（ ）は、筆者による補足である。Johann Pezzl, *Skizze von Wien: Ein Kultur- und Sittenbild aus der josephinischen Zeit. Mit Einleitung, Anmerkungen und Register, hrsg. v. Gustav Gugitz und Anton Schlossar*, Graz 1923
- (18) Pezzlの伝記的データに関しては、以下を参照のこと。Anton Schlossar, Johann Pezzls Leben und Werke: Einführung für Pezzls Skizze von Wien, in: Pezzl, a.a.O., S. V ff.; Gustav Gugitz, Johann Pezzl: Zu seinem 150. Geburtstage, in: Jahrbuch der Grillparzer-Gesellschaft, Jg. 1906, S.164 ff.
- (19) Johann Pezzl, *Faustin oder das philosophische Jahrhundert*, Zürich 1783
- (20) Johann Pezzl, *Marokkanische Briefe; Aus dem Arabischen*, Frankfurt und Leipzig (Wien) 1784
- (21) Voltaire, *Candide ou l'optisme* (1759), 邦訳: 吉村正一郎訳, 『カンディード』, 岩波書店, 1956年
- (22) Charles Louis de Secondat, baron de la Brède et de Montesquieu, *Lettres persanes* (1721), 邦訳: 大岩誠訳, 『ペルシア人の手紙』(上・下), 岩波書店, 1951年
- (23) Faustin に対する小説としての評価については, Bauer, a.a.O., S.99 ff.
- (24) Kauffmann, a.a.O., S. 199
- (25) Pezzl, *Skizze*, S. 3 ff.
- (26) A.a.o., S. 5
- (27) Ebd.
- (28) Lois Sébastien Mercier, *Tableau de Paris, 2 Parties*, Londre 1781
- (29) Zit. in: Kauffmann, a.a.O., S.211
- (30) Schlossar, Johann Pezzls Leben und Werke, S. XV
- (31) Kauffmann, a.a.O., S. 101 ff.
- (32) Abraham a Sancta Clara, *Hundert Ausbündige Narren, Mit einem Nachwort von Wilfried Deufert*, Dortmund 1978 (1. Ausg. 1709), S. 373
- (33) Pezzl, *Skizze*, S. 35
- (34) Ebd.
- (35) A.a.O., S. 55
- (36) A.a.O., S. 110 ff.
- (37) (Joseph Richter), *Der gewöhnliche Wiener mit Leib und Seele, Untersucht in einer Fäschungskinderlehre*, Wien 1784
- (38) Pezzl, *Skizze*, S. 185 f.
- (39) A.a.O., S. 187
- (40) Ebd.
- (41) Diderot および d'Alemberts による, 『百科全書 (Encyclopédie)』における “philosophe” の定義。Zit. in: Roy Porter, *The Enlightenment*, London 1990 (Deutsche Ausgabe: *Kleine*

Geschichte der Aufklärung, Berlin 1991), S. 12

- (42) Pezzl, *Skizze*, S. 56
- (43) Ebd.
- (44) Vgl. a.a.O., S. 198 u. S. 222
- (45) Wolfgang Nahrstedt, *Die Entstehung der Freizeit: Dargestellt am Beispiel Hamburgs: Ein Beitrag zur Strukturgeschichte und zur strukturgeschichtlichen Grundlegung der Freizeitpädagogik*, Göttingen 1972, S. 105 f.
- (46) Pezzl, *Skizze*, S. 56 f. ただし、Pezzlは、同時に、人間観察を抽象思考へと昇華させ、これを議論し合う場が、ウィーンにはむしろ稀にしか見られないことを指摘している。Ebd. 哲学的・抽象的思考よりも、感覚的なものを好む志向は、ウィーン都市文化全般の特色であった。このことは、18-19世紀におけるウィーンのスロンの雰囲気、北ドイツのそれとは全く異なるものにしてきた。ウィーンのスロンについては、Milan Dubrovic, *Veruntreute Geschichte: Die Wiener Salons und Literatencafés*, Wien 1987, hier bes. S. 137 ff.; Verena von der Heyden-Rynsch, *Europäische Salons: Höhepunkte einer versunkenen weiblichen Kultur*, München 1992, S. 160 ff.
- (47) Pezzl, *Skizze*, S. 115 f.
- (48) A.a.O., S. 34
- (49) Kauffmann, a.a.O., S. 229
- (50) Pezzl, *Skizze*, S. 150 ff.
- (51) A.a.O., S. 151 f.
- (52) A.a.O., S. 152
- (53) ウィーンにおける余暇や娯楽の問題については、Gerhard Tanzer, *Spectacle müssen seyn: Die Freizeit der Wiener im 18. Jahrhundert*, Wien 1992, hier bes. S. 69 ff.
- (54) Pezzl, *Skizze*, S. 221
- (55) A.a.O., S. 242 f.
- (56) A.a.O., S. 243
- (57) Ebd. Siehe auch: Tanzer, a.a.O., S. 114 ff.
- (58) 教皇が、貧しい農村地帯の住民などに対して、四旬節における乳製品等の摂取を特別に認める例はすでに15世紀からみられたが、18世紀のウィーンでは、食事に関する制限が教会によって正式に緩和される以前から、こうした特例措置が日常化し、ローマ教皇使節の門番に料金を支払えば、誰もが肉食のための「許可証」を入手することができた。Pezzl, *Skizze*, S. 243; Barbara Rias-Bucher, *Feste und Bräuche: Eine Einladung zum Feiern*, München 1999, S. 52
- (59) Vgl. Tanzer, a.a.O., S. 69 ff.
- (60) 謝肉祭をはじめとする宗教的祝祭がもった社会的機能、とりわけ社会的安定剤、あるいは安全弁としての役割については、すでに広く指摘されている。例えば、Emmanuel Le Roy Ladurie, *Le Carnaval de Romans: de la Chandeleur au mercredi des Cendres 1579-1580*, Paris 1979 (Deutsche Ausgabe: *Karneval in Romans. Von Lichtmeß bis Aschermittwoch*

- 1579-1580, Stuttgart 1982), S. 128 ff.
- (61) Vgl. Tanzer, a.a.O., S. 111 ff.
- (62) 散策が生活習慣として定着するプロセスについては、以下の論文を参照のこと。Tanzer, Spazierengehen — Zum ungewöhnlichen Aufschwung einer gewöhnlichen Freizeitform im Wien des ausgehenden 18. Jahrhunderts, in: Beiträge zur historischen Sozialkunde 2/1982, S. 67 ff.
- (63) Vgl. Pezzl, Skizze, S. 447 ff., S. 484 ff., S. 488 ff., u.a.
- (64) A.a.O., S. 221 f.
- (65) A.a.O., S. 25 ff.
- (66) Vgl. Leonardo Benevolo, *La citta europea*, Rom 1993 (Deutsche Ausgabe: *Die Stadt in der europäischen Geschichte*, München 1993), S. 163 ff.
- (67) ヨーゼフ 2 世は、その教会政策の一貫として、修道院や信心会、とりわけ、救貧活動などの社会奉仕を特に行わない団体について、これを解散させ、土地や財産を没収した。Vgl. Helmut Kröll, Die Auswirkungen der Aufhebung des Jesuitenordens in Wien und Niederösterreich: Ein Beitrag zur Geschichte des Josephinismus in Österreich, in: Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte 34 (1971), S. 547 ff.; Rudolf Hittmair, *Der Josephinische Klostersturm im Land ob der Enns*, Freiburg i. B. 1907
- (68) Vgl. Pezzl, Skizze, S. 93 ff., S. 386 ff., u. 390 ff.
- (69) Vgl. a.a.O., S. 338 ff.
- (70) A.a.O., S. 80
- (71) A.a.O., S. 81
- (72) A.a.O., S. 81 f.
- (73) Bodi, a.a.O., S. 225
- (74) 官僚作家と道徳週刊雑誌に関しては、Kauffmann, A.a.O., S. 133 ff. また、ドイツ語圏全域における啓蒙期の道徳週刊雑誌については、Wolfgang Martens, *Die Botschaft der Tugend: Die Aufklärung im Spiegel der deutschen Moralischen Wochenschriften*, Stuttgart 1974
- (75) 例えば、レオポルト 2 世は、その手記の中で、ヨーゼフ 2 世がパンフレット作家たちを積極的に政府のプロパガンダ活動に動員していたと報じている。Vgl. Bodi, A.a.O., S. 161 f. Siehe auch: Sashegyi, a.a.O., S. 131
- (76) Bodi, a.a.O., S. 17
- (77) Sashegyi, a.a.O., S. 98 ff.
- (78) Bauer の前掲書は、こうした複雑な状況下での文学形式、とりわけそのレトリックの在り方に関する個別研究である。その問題提起に際して、彼は、ヨーゼフ 2 世下の文学、とりわけ小説のレトリックは、必ずしも現実そのものを映し出すものではなく、啓蒙専制主義という、特定の地平からみた事例のもとに、現実を極めて単純化した形で捉える手段として機能したことを指摘する。Bauer, a.a.O., hier bes. S. 12 ff. また、個々の表現様式については、以下の箇所も参照のこと。Bodi, a.a.O., S. 138 ff.

- (79) Pezzl, *Skizze*, S. 386
- (80) バロック期以来の、華美な葬儀・埋葬の伝統を憂慮したヨーゼフ2世は、1784年、木棺の使用を禁じ、死体を麻袋に縫い込んで埋葬する旨の法令を出した。だが、この措置は帝国全土で猛反発を買ったため、皇帝は翌年これを自ら撤回した。Vgl. Hilde Schmörlzer, *A schöne Leich: Der Wiener und sein Tod*, Wien 1980, S. 59 ff.
- (81) Pezzl, *Skizze*, S. 38 f.
- (82) A.a.O., S. 94
- (83) A.a.O., S. 429
- (84) Ebd.
- (85) エンゲルハルト・ヴァイグル著、三島憲一、宮田敦子訳、『啓蒙の都市周遊』、岩波書店、1997年、351-355頁参照。貴族社会の封建的支配制度を辛辣に風刺した Beaumarchais の戯曲を、台詞劇として上演することは、パリと同様、ウィーンでも許可されなかった。しかし、Lorenzo da Ponte のイタリア語台本に Mozart が作曲したオペラという形式を取ることで、1786年3月1日、ウィーンの宮廷劇場での初演が実現したのである。
- (86) Johann Pezzl, *Neue Skizze von Wien*, 3 Hefte, Wien 1805-1812 この作品におけるペツルの視点の変化については、以下の箇所を参照のこと。Kauffmann, a.a.O., S. 241 f.
- (87) Johann Pezzl, *Beschreibung und Grundriß der Haupt- und Residenzstadt Wien*, Wien 1802, Vgl. Kauffmann, a.a.O., S. 242
- (88) ヴァイグル, 前掲書, 3-33頁
- (89) Vgl. Bodi, a.a.O., S. 20